

様にした。その結果、タイヤチューブが滑りやすいため、底に彫刻刀で格子模様の溝をつけたが、あまり効果が得られなかった。

- (2) 古いおねしょパットとバスタオルの利用、おねしょパットを楕円形 22.7 cm × 20 cm に 2 枚切り、縫い合せ使用してみたが滑るため、バスタオルを敷き作製したものを置いた。バスタオルはシートにくらべて滑りにくく、足の固定も良かったが、長時間の固定には耐えられなかった。
- (3) 市販の食卓用滑り止めマットの利用、食卓用滑り止めマット 25 cm × 35 cm を ½ に切り、楕円形にし、凹凸のあるサッカー地でカバーを作製し、使用してみたが、布が滑るため、底の ¾ にダーツを入れたが、ダーツは滑り止めの役目をはたさなかったので除去し、マットを足に直接使用してみた。足の固定もよく、長時間の起坐が保たれて、患児にも好評であった。夏は発汗のため滑りやすいのではと思われたが、その心配はなかった。マットは、ホコリがつくと効果が減少するので、2 週間に 1 度水洗いした。水洗の結果は洗浄前と変わらなかった。

【おわりに】

足の滑り止め (1) (2) を作製してみたが、片膝立て姿勢もさまざまで、同じ用具が適応できない場合もあった。食卓用マットの使用により足が滑らず安心して、長時間の起坐位が保てる様になった。今では車椅子での起坐姿勢が保ちにくい患児のために胸当に應用したり、又トイレで坐る時、足が滑りやすく、安定の悪い患児のために、滑り止めマットを便器の両端に使用している。

9. 末期患児を通じて 死に直面する他児へのアプローチ

国立療養所長良病院

郷 津 佐世子

【はじめに】

当病棟では、ここ 1～2 年の間に、数名の患児がベッド生活を余儀なくされ、この世を去った。前回、「ベッド生活の多くなった PMD 児の生活指導」と題して、当病棟の一患児の症例を取り上げ、「集団生活の中で、仲間や職員とのふれあいを通して、患児の生きがいを見つけ出し、より積極的に生活できるようにする」を目的とした研究を報告した。しかし、末期という特殊な状況にある患児だけに、十分な看護をするのに、難しい問題が多く残された、と反省されている。

たて続けになくなった患児を見て来た他患児にとっては、精神的動揺は激しいと思われる。今回は他患児が、彼らをどの様に見つめ、「死」をどの様にとらえているかを探り、この中から今

後の看護に役立つものが得られないだろうか、と思い、この研究に取り組んだ。

〔研究方法〕

- (1) カルテより抜粋・回想にて、ベッド生活を余儀なくされた患児の背景からの、問題点の把握
- (2) 親・職員への意識調査（中卒生の親16名）
- (3) 患児への意識調査（中卒生数名）

〔結 果〕

ベッド生活を余儀なくされた患児の背景からは、

- ① 死に対する不安感・恐怖心は常にあった。
- ② 職員や仲間とのふれあいを強く求めている。
- ③ ベッド生活上行なうことは、ごく限られていた。が、問題としてあがる。

「死」については、今だ残されている大きな課題である。そこで、親と職員に対して意識調査を行った。

①「死」又は死に関する内容で会話を持ったことがあるか。② 患児は「死」をどんな態度で受けとめているか。

①では、会話を避けている親や職員が殆んどであった。②では、年少時より自分の病気の進行を知り、他患児の死に直面する中で、年令に伴って、死を自然に受けとめて来ているのではないか。仲間が亡くなる時には悲しみを見せるが、自立したのではなく、自分なりにコントロールしている様子である。という意見が出された。

次に患児に対して意識調査を行った。

- ①自分がベッド生活になった時のことを考えるか。②病気・その他で日頃考えていることは何か。
- ③「生きがい」や「やりがい」となるものはあるか。

この中で、「死」や病気の進行に対しては不安はあるが、現段階では考えられない、ふれたくない問題であり、それよりもむしろ、自分なりに目標を持ち、積極的に行動に移している患児が多かった。

〔ま と め〕

この研究は、テーマの一角に触れたに過ぎず、患児への具体的な働きかけの方法をつかむまでに行かなかった。しかし、以前より深く、親、職員ともに、この難題に対して模索している様子があった。そしてまた、患児の気持ちを少し深く理解して行く糸口を見つけた様に思う。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

〔はじめに〕

当病棟では、ここ1~2年の間に、数名の患児がベッド生活を余儀なくされ、この世を去った。前回、「ベッド生活の多くなったPMD児の生活指導」と題して、当病棟の一患児の症例を取り上げ、「集団生活の中で、仲間や職員とのふれあいを通して。患児の生きがいを見つけ出し、より積極的に生活できるようにする」を目的とした研究を報告した。しかし、末期という特殊な状況にある患児だけに、十分な看護をするのに、難しい問題が多く残された、と反省されている。